

論文 1938-1939年のカビリー報道 : カビリー人作家フェラウンの出発点として

著者	青柳 悦子
雑誌名	文学研究論集
巻	35
ページ	1-21
発行年	2017-02-28
その他のタイトル	Articles Three Reports on Kabylie in Algerian Newspapers in 1939-1939: What motivated a Kabylean teacher to become a writer?
URL	http://hdl.handle.net/2241/00146012

要旨

1938-1939 年のカビリー報道 —カビリー人作家フェラウンの出発点として—

青柳 悦子

アルジェリアのカビリー地方は、フランス植民地支配下においてとりわけ同化政策が推し進められた地域であった。辺境と位置づけられるこの地方をめぐる、1938 年末から 1939 年春にかけてアルジェの大きなフランス語新聞三紙が、こぞって特別取材によるルポルタージュを報道した。本研究は、これまで十分な検討がなされてきたとは言えないこの三つの連載記事（ジャンン、カミュ、フリソン＝ロシュ執筆）について、掲載紙に直接あたり、併載の写真を含めて丹念な検証をおこなう。それぞれの記事の特質を改めて抽出した上で、これらの記事への反発として当事者たるカビリー人の中からどのような動機をもって自分たちの姿を書く作家が誕生してきたのかを考察する。

Abstract

Three Reports on Kabylie in Algerian Newspapers in 1938-1939: What motivated a Kabylie teacher to become a writer?

Etsuko AOYAGI

Kabylie is a region where the politics of civilization and assimilation was pushed ahead under the French colonization. In the end of 1938 and in the spring of 1939, three reports were published on the three French major newspapers in Algiers. This paper undertakes close examination on these articles written by René Janon, Albert Camus, and Roger Frison-Roche, especially taking into consideration pictures that appeared in them. By picking up characteristics of each report, we will clarify the cause for which a Kabylie teacher Mouloud Feraoun started to write a novel of collective portrait of his country.

1938-1939年のカビリー報道

—カビリー人作家フェラウンの出発点として—

青柳 悦子

1. はじめに

アルジェリアの北東部にはアラビア語ではなく古来の独自の言語を用いて生活するカビリー人の住む地域がある。フランス植民地時代にカビリー地方の山村に生まれたムルド・フェラウン(1913-1962)が最初の小説『貧者の息子』(Feraoun 1950)を執筆し始めたのは1939年4月のことであったと考えられる。すでに教職にあり、その後も職業作家となることはなかった彼はなぜ執筆を志し、困難を押して書き続けたのだろうか。その背景の一つに、1938年末から1939年初夏にかけて相次いでアルジェの新聞に連載されたカビリー報道の記事があったと考えられる。フェラウンはこれらのフランス語紙のルポルタージュを目にし¹、自分たち自身で自分たちの姿を描かねばならないという思いを強くして執筆に取り組んだのだと想像される²。それらの連載記事とは掲載順に以下の3つである。

- 1) ルネ・ジャンン執筆「高地カビリー地方の概観のための断章」『エコー・ダルジェ』³紙、1938年12月12日~25日、計10回(Janon 1938)
- 2) アルベール・カミュ執筆「カビリーの悲惨」『アルジェ・レピュブリカン』紙、1939年6月5日~15日、計11回(Camus 1939)⁴
- 3) ロジェ・フリソン=ロシュ執筆「カビリー 39」『デベッシュ・アルジェリエニス』紙、1939年6月8日~17日、計10回(Frison-Roche 1939)⁵

いずれも毎回、写真か挿絵がつく、大きな扱いの連載記事である。

これまでの研究では、この三つの記事が相互に競合的關係にあることが指摘されているほか、大まかな性質の違いについてほぼ以下のように言及されてきた⁶。ジャンンについてはカビリー人に対する偏見に満ちた姿勢が批判され、カミュについては人道主義的な連帯・博愛の精神と大胆な体制批判を評価する傾向が強い。フリソン=ロシュについては、その明確な植民地支配体制寄りの姿勢が否定的に論じられる⁷。いずれにしてもカミュ研究の枠組みの中でおこなわれることがほとんど

で、カミュ以外の二つの記事に対しては、十分な検討がなされているとは言い難い。

フランス語を読める当時のカビリーの人びとが大きな関心を持って読んだに違いないこれら三つの記事について、本稿では掲載紙に直接あたって、それぞれの記事の特徴を精査し比較検討することにした。とりわけ、これまでなされたことのない、併載された写真等を参照した議論を積極的に展開する。記事文面の研究だけでは報道内容の特徴を捉えるには不十分だからである。その上で、それらとの対比によって見えてくるフェラウン作品の特徴を指摘することまでを本稿の目的とする。

近年の資料情報公開に対する意識の高まりと技術の飛躍的発展によって、フランスの国立図書館を通じて、幸いこの三記事のいずれもについて、掲載時の紙面を比較的良好な状態で閲覧することが可能となった⁸。本研究はこの恩恵によって実現したものである。なお紙面の経年劣化のため不鮮明な写真が多いことはお赦しいただきたい。

2. ジャノン「高地カビリー地方の概観のための断章」1938年12月

カビリー報道の先陣を切ったのは、急進社会党系の新聞と言われる『エコー・ダルジェ』⁹紙に1938年12月に掲載されたルネ・ジャノンの記事である。ジャノンは「アルジェリアニスム」¹⁰の作家の一人で、すでにいくつかの小説を発表していた¹¹。この新聞の編集委員も務めていたジャノンは、アルジェリア在住コロ（ヨーロッパ系入植者およびその子孫）の立場を代表する典型的な文化人であると言える。

ジャノンの記事については、総タイトルの中の「ジオラマ」という言葉に象徴されるようにカビリーの大自然を称揚し、またカビリー人の習俗に焦点を当てた記事という点が、研究では必ず指摘される。だがそれは記事を実際に閲覧してみれば妥当な見方とは言えないことがわかる。この見解が繰り返されてきたのは、ジャノンの記事については多くの研究が、カミュ研究者レヴィ＝ヴァランシによる要約に依拠することで満足してきたからである¹²。彼女は、ジャノンがカビリーのすべての問題を住民のメンタリティに帰していると非難していた¹³。また、フランスによる支配を賛美し、自分たちこそフランス人だと主張するカビリー人の台詞¹⁴を引用していることに言及して、ジャノンのあからさまな同化主義を批判していた。

では、以下にあらためてジャノンの記事の内容を検討することにしよう。まずはその概要をまとめておく。

回	日付	掲載紙面	題名	主な内容	図版数
1	12/12	1・2	「12月のカピリー地方。壮大さと官能性……」	自然の賛美と矛盾の強調	1
2	12/13	1・2	「カピリー人のいないカピリー地方……」	人口過剰問題、出稼ぎ	1
3	12/14	1・2	「フランス人コロンの禁じられた土地！」	フランス人住人の少なさとその理由、カピリー人の性質	2
4	12/16	1・4	「小麦公社 ¹⁵ がカピリー人を貧困に追い込む、穀物生産の低さと大量消費……」	小麦公社批判、互助会制度、農業改革の諸案	1
5	12/17	1・4	「“カピリーの災い”高利貸し」	住民の経済問題とその改善策	1
6	12/19	1・2	「ベニ・イエンニ地域での困難な旅」	道路と水の問題、近代化のための諸提案	2
7	12/20	1・5	「ベニ・イエンニ地域の旅の続き」	教育問題、とくに女子教育の普及の必要性	1
8	12/21	1・5	「予算の不安をかかえるカピリーの諸共同体」	電気敷設、医療の問題	1
9	12/24	1・6	「カピリーの多くの地域が市町村化を希望していると思われる」	行政組織の問題	1
10	12/25	1・4	「ジェマア・サハリジ村、象徴的な事例……」	理想的な村の例、カピリー人のフランス帰属意識の礼賛	2

【挿絵・写真の概要】(○数字は通し番号。キャプションがある場合には「」で記す。挿絵は番号に*印を付した。それ以外は写真)

第1回：①*風景と人物像 第2回：②*風景

第3回：③*村にやってきた黒塗りの自動車 ④*ロバに乗って進む二人の男

第4回：⑤*「メシュトラのカピリー樹木栽培学校」

第5回：⑥*「ティジ＝ウズの裁判所の法廷の出口」

第6回：⑦*「アイト＝ラルバアの村の頂上に500メートル四方の町が築かれた」 ⑧*「タウリルト＝ミムのモスク」

第7回：⑨「ベニ＝イエンニ地区のタウリルト＝ミムの近代的な女子小学校」

第8回：⑩「ベニ＝イエンニ地区のタウリルト＝ミムの男子学校」

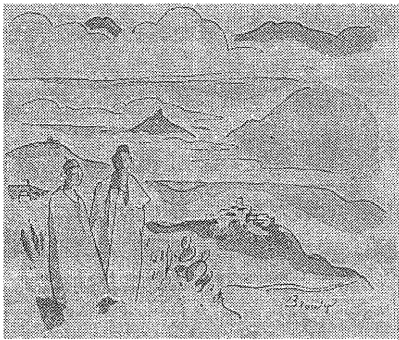
第9回：⑪「ウマル地域の行政中心地である峰上のタデルト＝ウ＝フェッラーの集落をフォール＝ナショナルから望む」

第10回：⑫*「ジェマア＝サハリジのモスク」 ⑬「ジェマア＝サハリジの立派な女子学校」

この表で「主な内容」として抽出したものが、ジャンンの指摘するカビリー地方の諸問題であるが、コロンの立場を代表して、フランス国家の一部としてカビリー地方があることを積極的に評価し、この地域の発展可能性を探るとというのが彼の記事の基本的な姿勢である。以下にこの記事のさらに詳しい特色を整理してみたい。

1) 風景の美しさについて

実は諸研究が強調するほど、この連載記事はカビリーの自然の美しさを謳ってはいない。自然の謳歌は、観光・レジャー資源としての側面を明確に打ち出した第1回目のみであると言ってもよい。とはいえ連載全体にわたるシャルル＝ブルティ¹⁶のクロッキーによる挿絵の印象は大きいだろう。挿絵総数9点のうち5点(①②⑤⑦⑩)は牧歌的な抒情漂う風景画と言ってよいものである。



①桃源郷ないし神仙郷のイメージ



②典型的な風景画

2) カビリー人の土地としてのカビリー

第1回からジャンンはこの地にフランス人が少ないことを指摘している。とくに第3回では、かつては農村地域への入植を試みたヨーロッパ人がかなり存在したものの、今では残っているのはわずかであることが報告されている。実はレヴィ＝ヴァランシが、ジャンンがカビリーの諸問題を住民のメンタリティに帰しているとして引用しているくだりは、「われわれ」フランス人が植民に失敗した理由として掲げられたものである。つまりカビリー人ほどの忍耐力もないフランス人には収益率も低いこの厳しい土地での農耕は無理で、また住民の土地への執着が強く容易には手放してくれないというわけである。ジャンンはこの地方を〈入植型〉の植民地とすることを諦め、その代わりに現地民によるこの地域の発展を促す方向の提言をおこなっていく。

3) 具体的な改善策の提示

ジャンンは実に多くの提案をおこなっているが、それらの特徴は内容が具体的で、またこの地域の実態をよく捉えた上の提言であることである。農業改革としては、品種と品質による選別、樹木の適切な剪定、近代的機械の導入、土地区画の大規模化、生産者自身による大都市への直接輸送などによって、収益の増加が可能だとする（第4回）。ほかに工芸の復活・活性化のための小規模工場化、工芸職人のプライドに合う上質な製品を作り続けるための観光客の誘致、卓越した技術を生かした新産業（たとえば時計製造業）の導入などの具体策が提示される（第6回）。ジャンンが農業や産業の実態についてかなりの知識と強い関心を持っていることが伺われる。

4) 住民の自主性と伝統文化の尊重

これらの提案において注目されるのは、カピリー人自身の工夫によって産業を発展させ、生活を向上させることが目指されていることである。また、住民の文化を否定的に捉えるのではなく、むしろ、「住民互助会」¹⁷を高利貸しの弊害から住民を守る有効な組織として評価したり（第5・6回）、村ごとの慣習法や伝統的な合議システムをフランス法に並ぶ貴重な社会資源として高く評価したり（第9回）する。道路・水道・電気の敷設も学校建設も、政府への要望を出す一方で、住民自身の力で実現させることが可能だとし、そのための出費は住民たちにとって結局損にならない投資であることを強調している（第5・6回）。なお、衛生と住環境の改善を唱えながら、伝統的家屋の「美しい」たたずまいの尊重も願っている（第7回）。

5) カピリー人の「人」としての姿

とくにカミュと異なるジャンンの筆致の特徴として指摘できるのは、案内役など接することのできたカピリー人の具体的な人名が挙げられるとともに、プロフィールが紹介され、またその人たちの意見が引用のかたちで紹介されていることである。案内人 Arezki 氏（第1回）、フランスの自動車工場でメカの知識も養ったタクシー運転手 Arzour（第2・3回）など多数が登場する。あるいは名前には出されないが、児童の能力の高さを証言する幼子をかかえた25歳の女子小学校教師とその夫の男子学校教師、教養あふれる成功した男性だが妻が文字を読めないのが残念という30歳の地域責任者（第7回）など¹⁸、人物の実例を通してカピリーの実態を探り、読者に伝えようとしている。小説家ならではの叙述法であろうか。ただしジャンンの情報源が植民地行政側にきわめて近い人物に限られているという偏りは顕著である。

6) 産業化による未来図

最後に付け加えておくと、ジャンンの提言は、産業と経済の発展を社会の向上の

絶対基準に据えるという価値観に基づいていることが顕著である。

3. カミュ「カピリーの悲惨」1939年6月

『アルジェ・レピュブリカン』は1938年10月創刊の日刊紙で、政府・植民地行政府の支援に拠らない左翼進歩的な独立紙であり¹⁹、人民戦線寄りの性格を持っていた。左翼的立場に共鳴していた20代半ばのまだ無名の青年だったカミュは創刊時から1年あまり、この新聞で新米の政治・社会記者として経験を積む。フランスの人民戦線内閣は1937年6月には崩壊していたので、カミュのカピリー記事は基本的にこの新聞の傾向である、民衆・労働者の側に立った現政権批判の目的のもとに書かれたと言ってよい。カピリーへの取材旅行は1939年5月後半におこなわれた。むろん、左派系ライバル紙『エコー・ダルジェ』に掲載されたジャンンの記事に触発され、季節が良くなるのを待って、実行されたものであろう。

以下に概要をまとめる。

回	日付	掲載面	題名	主な内容	写真数
1	6/5	1	「ぼろをまとったギリシア」	人びとのみじめな状況、気力もない人々に「救い」の手を	5
2	6/6	1	「極貧状態」	子供たちがごみ箱の残飯を犬と奪い合うほどの極限的な困窮	2
3	6/7	1	「極貧状態」(つづき)	配給の不足について	1
4	6/8	1・2	「侮蔑的な給与」	低賃金長時間労働の実態	1
5	6/9	1	「住まい」	窓のない家、家の中に家畜、糞尿と共に生活、下水道と化した路	3
6	6/10	1・2	「医療」	医療の不足	2
7	6/11	1	「教育」	学校数の不足と豪華な学校の批判	2
8	6/12	1・2	「カピリー経済の2側面：工芸と高利貸し」	工芸品の産業の壊滅状態、高利貸しの横行と人々の借金苦	2
9	6/13	1・2	「政治的展望、共同体組織」	カーイド制の批判	2
10	6/14	1・2	「生きるためにカピリーが求めること」	給与、失業問題、農産物買取価格、移民労働、インフラの改善	2
11	6/15	1	「結論」	征服者としてのフランスの責務	1

【写真キャプション】(○数字は通し番号)

第1回：①「ティジ＝ウズの部族のこの農民は、土と糞を混ぜている。それを使って家を作る」②「ボルジュ＝メナイエルのこの哀れな人々は、家族を数日間養える数リットルの麦が慈善として配られるのを辛抱強く待っている」③「クク村のこの倒壊した家を借りて

いた人は現在は家なしである」 ④「アドニ村の崩れた家。10人家族がなおここで暮らしている」 ⑤「ボルジュ＝メナイエルのこのあばら屋には5・6人の家族が住んでいる」
 第2回：⑥「シディ＝アイシュ近くのエル＝フライ村ではいくつもの家が崩れ、起こすことができない」 ⑦「この子が背負っている食糧で5人が15日間暮らさねばならない」
 第3回：⑧「フォール＝ナショナルで穀物の配給を待っている女性と子供たち」
 第4回：⑨「カピリーで毎日出会う光景：結膜炎に侵されたこの両目はもう見えない」
 第5回：⑩「エル＝フレイ村の中心の通りは下水道同然である」 ⑪「廢屋に住みついた知恵遅れのこの不幸な女性はタグムントの住民たちの施ししか生きるすべがない」 ⑫「ボルジュ＝メナイエルの原住民用新住居群。それぞれの家が2世帯から成っている」
 第6回：⑬「ウアディアスで会ったこの甲状腺腫患者は、唾で財産もない」 ⑭「またもや哀れな人々。フォール・ナショナルで穀物の配給を待つ人々」
 第7回：⑮「学校が十分に作られれば、カピリーの子供たちは皆、この子のようになるであろう」 ⑯「ジェマア＝サヒリジの宮殿のような学校」
 第8回：⑰「製作品を見せてくるジェマア＝サヒリジの工芸職人たち」 ⑱「ジェマア＝サヒリジの木彫職人たちの見事な作品は1937年のパリ万博に出品された」
 第9回：⑲「ウマルの役場」 ⑳「ウアディアの市は毎年7万フランの売上をもたらす」
 第10回：㉑「ベニ＝イエニ地域に最近作られた井戸」 ㉒「ポール＝ギドン共同体に建造された、清め場を併設した17の水場のうちの一つ」
 第11回：㉓「カピリーの可能な未来像。人々が飢えと悲惨なしに暮らす偉大で健全な邦」

カミュの記事については多数の研究があるが、紙面を直接見て観察できることのなかから特筆すべきことは以下のとおりである。

1) 重要な「看板」企画としての扱い

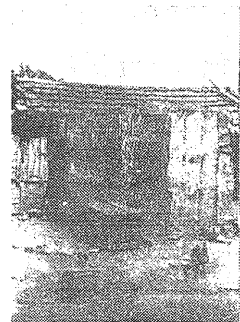
第1回はほぼ第1面全体を使い、しかも5枚の写真を掲載しており、また第2回も第1面の上半分を占めるトップ記事の扱いとなっていて、この新聞の「顔」となる重要な企画として位置づけられていることがわかる。ジャンンの記事が、第1面を使いながらもその下の方の一部分を使う程度であったのとは格段の相違である。

2) 告発記事としてのセンセーショナルな報道

カピリーの民衆の窮状を改善



③崩れた家の一つ



⑤みじめな「あばら屋」

しようという善意からではあるが、カミュの記事はそのタイトル通り、カピリーをあらかじめ「悲惨」な場所と規定し²⁰、「非人間的」で動物並みのその惨めさをひたすら描き出すものである。多くの回で複数の写真を用い、挑発的なキャプションを添えて、その惨状を赤裸々に伝えることにカミュは徹している²¹。ジャンノンの記事でのブルティによる挿絵は牧歌的な風合いのもの、写真は近代的な建物を写した平板なものであった。それに対してカミュの記事では、たとえば、崩れたあるいは崩れかけた家（③④⑤⑥）、病に冒された人のアップや全身像（⑨⑬）、配給に並ぶ「哀れな人々」（②⑧⑭）、配給を持ちかえる裸足の少年（⑦）、廃屋に住みついている「知恵遅れの」「不幸な」乞食暮らしの女性（⑩）など、ことさら惨めな光景や人物の姿をキャプションとともに強調する。写真の構図は、しばしば、カメラを構えた取材者の前に被写体の人物を直立させたという、撮影者の権力と視線の暴力を感じさせずにはいないものになっている。



⑬首の下が腫れた病気の男



⑭配給に並ぶ「哀れな人々」



⑦配給の袋を持つ少年

3) 都会人カミュの視線

貧しいとはいえアルジェという大都会で育ったカミュにとっては、農村の暮らしそのものが、人間として耐えがたい劣悪なものに映る。カミュが繰り返し告発するのは、「家の中に家畜がいる」生活、窓のない暗い家、家にも道路にも下水施設がなく「糞尿まみれ」の日々を送るという悲劇、家畜や尿尿の悪臭、暖房・電気・水道のない暮らしである。生活水準は現金収入で測られ、「ばかばかしい」「愚弄にみちた」低賃金・低収入で暮らす人々の理不尽な悲惨さが強調される。カミュは、換金されない収穫物の価値、交換経済による物資の調達を考慮しない。関心は賃労働にあり、農業に関しても行政による買い取り価格の引き上げが主な提案内容である。

4) 統計的数値の列挙と「マス」としての把握

カミュの記事が統計的数値を非常に多くまた雄弁に用いたものであることは一読して明らかであり、それはカミュの記事に説得力を与えるものと評価できるし、現実をとおして人々の悲惨を訴えようとする社会派ヒューマニズムに直結する書き手の姿勢をここから読みとることもできる。一方で、統計的数値の多用は、カピリー人を「マス」として捉え個々の人間に目を向けないという偏りを伴うことになる。

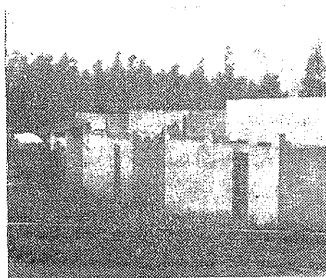
5) 「施し」の対象としてのカピリー人

この「悲惨」な状況を踏まえたカミュの主たる提案は、フランス行政側からの配給を増やすことと、公共事業による給与支給、最低賃金の順守などによる収入額のアップである。連載記事を一貫して、カピリー人は主体性を欠いた、フランスからの「施し」の対象とみなされている。写真でも待つ人、もらう人としての姿が繰り返される。カミュの告発と提案はもちろん人々の生活向上を願っての主張であるが、すでに述べたように記事の目的は現政権の施策批判に置かれているように思われる。

6) 同化主義

カミュがほかの二つの記事の書き手と同様、被植民者をフランスへ「同化」させることを絶対善とする立場に立っていることは驚くほどである。最終回で、「カピリー人はまだフランス人ではないが、フランス人でありうる資質を有している」と述べることでカピリー人を称揚しているカミュは、フランス人になりきることによって初めてカピリー人が人間として出発し得ると考えているかのようである。公的に建造された味気なくも思える清潔な白い四角い建物(⑫)や、大きな三色旗が建物脇に翻るフランス式窓のついた役場(⑬)をおそらく好ましい事例として紹介したり、観光用のモニュメントで胸を張る男性の写真をカピリーの未来像として示す写真⑭などは、こうしたカミュの同化的進歩主義の発想をよく表すものであろう。

カミュ自身はこの記事を、人々への連帯の姿勢を報道記事というかたちで具体化



⑫新しい住居群



⑬役場



⑭脇にはヨーロッパ人観光客が映る

した自信作であるとみなしていたと思われる。それは、ほぼ20年後、アルジェリア独立戦争の激化するさなかにアルジェリア関連の評論集を編み(Camus 1958)、その中核を占めるものとして、第1・5・6・8回の記事を除いた計7日分の記事を(写真は省いて)再録したことに表されているだろう。

4. フリソン=ロシュ「カビリー 39」1939年6月

保守系ヨーロッパ人の新聞で、アルジェ総督府など行政当局ときわめて近い反動的な立場にあった『デペッシュ・アルジェリエンヌ』紙に連載記事を書いたフリソン=ロシュは、本土生まれの登山家・探検家である。1906年にパリで生まれ、15歳でモンブランに初登頂、十代でシャモニーの公式ガイドとなった。またサヴォワの地方紙ほかで報道の経験を重ねてきた。1935年に初めてサハラ探検隊に加わり、その体験から小説を出版している。1938年にはアルジェに居を移し、その年から『デペッシュ・アルジェリエンヌ』紙の記者を始めた²²。

カミュの記事の連載開始3日後に掲載が開始されたフリソン=ロシュのルポルタージュの取材旅行は、おそらく前年中におこなわれたものと思われる。寝かせてあった素材が、左派紙でのカビリー報道を契機に対抗記事として書かれ、一気に10日間の連載として掲載されることになったものと想像される。

概要は以下のとおりである。(掲載面はすべて第4面である)

回	掲載日	見出し(「」内は強調文字)	主な内容	写真数
1	6/8	「進化する人々…」、…だがフランスのまったき県であるこの人口過剰地域で新たな諸問題が生じている	カビリーの豊かさ(悲惨の否定)と大きな可能性、フランスへの帰属の強調	1
2	6/9	……近代化への熱望とともに伝統への愛着を持つが何より深くフランス的なカビリー人の魂を私たちは理解すべきである	カビリー人のメンタリティ、案内役の西欧化された弁護士青年の伝統的な考え方とふるまい、人々のフランスへの熱意	2
3	6/10	「カビリー問題の一側面。女性の進化!」	女子教育の遅れと今後の改善	2
4	6/11	「カビリー民族の同化は、男性と同等の水準に女性が進化して初めて完成する」	カビリー人女性を「進化」させる必要性	2
5	6/12	「小麦で生きている民族……だがその生産はしない」	徒歩による取材の強調、小麦公社批判	2

6	6/13	「7日に1度、人気のない谷が活気づく！男性は皆カピリーの市に出かけ、村はこの日女性たちのものになる」	重要な商業機会であると同時に社交や情報交換の場である「市」について	2
7	6/14	道路は常に繁栄をもたらす。道路のおかげでカピリーの住環境はゆっくりだが確実に変化していく。	道路建設とそれに伴う新たな地域発展のアウトライン	2
8	6/15	「人口過剰のカピリー地方」カピリーの複合問題を解決するには、男性の出稼ぎを奨励するよりも、家族ぐるみの移民を促進するべきではないか？	人口過剰問題、地域の経済・産業の発展では限界があること、フランス本土（とくに南西部）への家族移住の提案	1
9	6/16	樹木栽培政策の続行、工芸の新たな展開、地域の工業化推進、観光資源の開発によって近い将来カピリーの運命を変えることができる	産業化の諸提案（果樹栽培、工芸、工場、観光について）	1
10	6/17	フランスへのカピリーの愛着はあまりにも美しい。私たちは同じ熱意をもって応えるべきではないか	フランス人としてのカピリー人、フランス支配の美化	2

【写真説明】（○数字で通し番号を付す、キャプションが長い場合には概要を記す）

第1回：①峰にはりつく村の住居群

第2回：②「活動的で、頭のよい」人々 ③丘の上の密集した住居群の間の新住宅

第3回：④「優雅に」水の壺を運ぶ女性 ⑤「無知蒙昧の数世紀の重みで女性たちの身体は地面に向けて曲がってしまった……」

第4回：⑥狭い路地に並ぶ低い家々、闇と光の対照 ⑦峰の上の二つの村と近代施設

第5回：⑧山道と背後の美しい山並み ⑨奥地の奇岩の景勝

第6回：⑩市内の肉屋とまわりの人々 ⑪「活気にあふれ情趣に富む」市の光景

第7回：⑫荷を載せたラバを連れて男性が山道を行く姿。「すべての地域で道路への改修がなされるべきである。」 ⑬舗装道路と電気の整った新住宅地の広がり

第8回：⑭道路の通っていない険しい峰上の村

第9回：⑮イチジクの美しい栽培林

第10回：⑯「イシュリデンの記念碑」 ⑰「カピリー！フランスの荘厳な地方」

フリソン＝ロシュの記事はすべて第4面に掲載されたもので、政治的意図を全面に打ち出した新聞の「顔」のようなものではなく、むしろ文化記事に類する位置づけであるように思われる。植民地支配の成功を躍起になって喧伝している感のあるこの記事について、以下にさらなる特徴をかいつまんで取りあげてみたい。

1) 景勝地としての紹介

フリソン＝ロシュの記事の特徴は見事な写真である。山岳ガイドを務め、探検取材の報道経験も豊かなフリソン＝ロシュは写真の技術に優れていたのであろう。記事全体が、フランスに帰属する美しい一地域としてカピリー地方を礼賛している。



⑨奇岩の周辺に住居が点在する奥地



⑩すばらしい秘境の風景

ただプロの山岳家の写真であるので、人びとに観光地として訪問を促すというよりは、この記事自体を楽しんでもらうという意図があると思われる。とはいえ、フランスの一地方としてカピリーが今後望ましい発展をすることを願って、彼も数々の提案をおこなっている。

2) カミュ批判と山村・農村文化へのまなざし

フリソン＝ロシュは、カピリー地方を「悲惨」の地と捉えることに反論し、「悲惨は世界中どこにでもあるし」、むしろ「都会にこそある」と述べ、農村や地方の生活のあり方や流儀を理解しない狭隘な都会人カミュの視線を批判している（第1回）。そこで強調するのが自身の取材方法の質の高さである。カピリー地方を訪れるのは3度目であり、とりわけ今回は数週間の滞在をおこなったという。

3) 徒歩も駆使した取材

自動車を使つては行くことのできない山間部に取材したことを、フリソン＝ロシュはとくに第5回以降、強調する。記事内容などから考えて、三人の記者が訪ねたと思われる場所を比較してみると、ジャンンは本人が述べるように「新しくできた道路」に沿って、ヨーロッパ人が多く住む比較的大きな町を中心に訪ねていることがわかる。カミュはやや小さな町や村も訪ね、また海岸部や東部の町などへ広く

足を伸ばしている。ただしすべて道路沿いの地域である。これに対して、フリソン＝ロシュは最南部すなわちもっとも山の険しい地域にまで徒歩で赴き、上に挙げた壮大な風景写真のほか山道での写真（⑧⑩）を披露していることが特徴である。

4) 民俗学的な観察

もともと社会告発の意図をもたない記事であり、民俗学的なあるいはほとんど文化人類学的な視点から人々の営みを尊重しつつ観察し、そのうえで進化を唱える点がフリソン＝ロシュの特徴である。人物写真は上方からの俯瞰的撮影が特徴で、市の活気（⑩⑪）や人々の生き生きした姿（②）を捉えたもの、女性問題を告発しつつも水を重そうに運ぶ女性を「優雅」と形容する一枚（④）、年配の女性のしわまで趣深く捉えたショット（⑤）などに、訪問者からみたこの地の人間の魅力が写し取られている。



⑩市の肉屋と周囲の人々



⑪谷底の川岸に立つ市の活気



②生命力を感ぜさせる人々



④水の壺を背負う女性



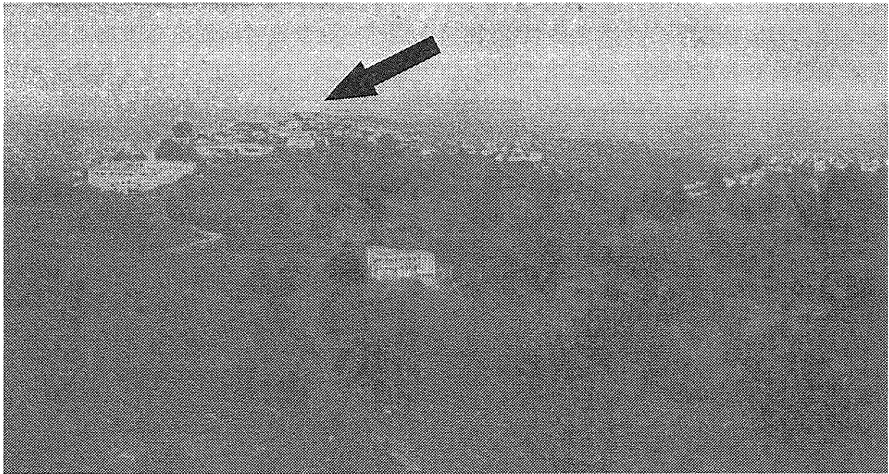
⑤高齢の女性たちの姿

5) 「進化」主義

フリソン＝ロシュの姿勢としてきわめて特徴的なのは、フランス本土出身者であるせいか、ヨーロッパ化・近代化を意味するものとしての「進化」を絶対的な理

想に設定する、完全な同化主義の立場を表明していることである。第1回の表題にも現れているように、「進化する」*évoluer* という動詞や、「進化した」*évolué(e)* という形容詞の頻出には面食らうほどである。カミュもそうであったが、人口過剰問題の解決策としては、男性の出稼ぎ労働ではなく、本土への家族ぐるみの集団移住を提唱する。すなわちカビリー人であることから脱して、完全なフランス人になることを、人々の「進化」による生活向上のための最良策として提示するのである。フランス語を話し、フランス風の生活様式を身につけ、フランス市民権を取得し、フランス人と気兼ねないコミュニケーションをして、場合によってはカビリーを去って暮らすこと、これがフリソン＝ロシュの描く、「進化した」カビリー人の姿である。フリソン＝ロシュは、勤勉で頭が良いというカビリー人の性質だけを資質として残し、中身をそっくりヨーロッパ人に変えたような人間への変貌を推奨しているようにも思われる。

当面のところフリソン＝ロシュが理想とするのは、キッチュと思われるほど、近代性と山村文化が融合する景観であるのかもしれない。



⑦左の村のてっぺんの白い巨大な水タンク（きのこのような形のもの、矢印の先）と、中腹に建てられた二つのキリスト教布教館の大きな近代的建築が目を引く

5. おわりに——フェラウンの試みの素描.

三記事はいずれも植民地維持の立場に立ってカビリー地方の向上策を論じたもの

であった。取り上げる問題は三紙ともほとんど変わりがなく、人口過剰、食料問題、出稼ぎ、高利貸し、道路・水道・学校の整備、衛生・医療、女性の地位向上、経済発展の諸方策などが論じられていた。ジャンンは住民による産業発展、カミュは政府の施策の改善、フリソン＝ロシュは地域の魅力を確認しつつ人々をフランス化することに重点を置いていたと言える。

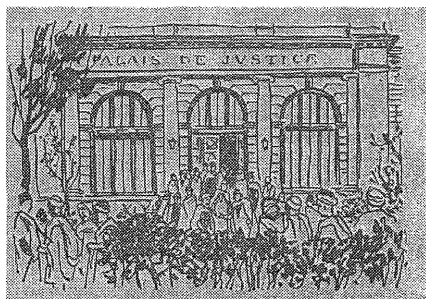
これら3つのカビリー報道記事との対比によって見えてくる、カビリー人作家フェラウンの執筆動機を、その作品の特徴をもとに素描して本稿の結びとしたい。

第一に、外部から観察されるカビリー文化ではなく、その社会の内部に生きる人間の目から、生きる現場として社会を描き出すことである。訪問者ではなく住民の視線、フランスの価値基準によるのではなく住民自身の見方に立ってカビリーの特質を改めて検討することが課題とされる。

第二に、カビリーの普通の人々を一人一人違う「人間」として描くこと。個人に言及するジャンンの記事ですら、フランス語で自己表現できる特別な人間しか紹介されず、しかも何かを例証するための一面的存在として利用されていた。またブルティの挿絵では、人間が描かれている場合でも人物が極端に抽象化され（前掲ジャンン①、および以下の2点を参照）、表情と個性、とりわけ内面をもった人間の姿は表象されることがなかった。



ジャンン⑤ 風景の一部と化した人間



同⑥ ほとんど「顔」のない群衆

フリソン＝ロシュの写真も人物は外面的な観察の対象であると言える。カミュに顕著だったように「マス」として住民を捉えるのではなく、それぞれ異なった事情や性向を抱えたカビリー人の多様な姿を描き出すことが、おそらくどんな生活改善策よりも人々の人間性の回復のために必要だとフェラウンには思われたのではないだろうか。

第三に、カビリー独自の豊かさを示すこと。それはヨーロッパ的な「進化」や産業化のみを人間にとって不可欠な向上だとする見方を相対化することになる。他者

からみれば劣悪に見えても（電気や水道がなくても）、その中に生きている者からすれば、豊かな生を営むことのできる生活空間がある。物々交換や自給によって自律した生活が営まれ、実に複雑な社会が形成されている。『貧者の息子』第二部の末尾で、時期を1939年春と明示した上で、主人公が「愛と尊敬に包まれる幸せ」に浸された満ち足りた「光り輝く春」であったと総括し、また第三部冒頭では「治療」が必要なほどカピリーの村々に物が溢れ平和すぎたと叙述している²³のは、まさにこれらの新聞記事への強烈な反論であるだろう。

最後に、カピリー人がカピリー人であり続ける姿を描くこと。フランス語に熟達し、学問を積んだからといって、フランス人とはならない生き方を顕示すること。カピリー人がカピリー人のまま発展しうること、他の何者かに変貌しなくともすでにカピリー人が十分に現代世界の一員として生きていることを示すこと。

こうしたことが、自分たちの姿を外部の目から描き出す度重なる記述に触れて、どうしても果たさなければならぬ課題として現地民フェラウンの中に湧き上がってきたのではないだろうか。

*本論文は、文部科学省科学研究費基盤研究(C)平成26-30年度「21世紀的視座から見る北アフリカ(チュニジア・アルジェリア)の現代文学状況」(代表・青柳悦子)、同(A)平成24-29年度「アラビアンナイトの形成過程とオリエンタリズム的文学空間創出メカニズムの解明」(代表・西尾哲夫)、同(B)平成26-29年度「アラブ＝ベルベル文学の比較地域文化的研究体制の構築」(代表・鶴戸聡)の補助を受けた研究成果の一部である。

注

- 1 フェラウンがカミュの取材の様子を見かけたこと、そして報道記事を読んでいたことについてはカミュ宛の最初の私信(1951年5月27日付)および1958年の公開書簡で触れられている(Feraoun 1969, p.203; Feraoun 1972, p.35)。フェラウンの処女作執筆過程については青柳(2016)も参照のこと。
- 2 三紙のカピリー報道と比較されるフェラウンの作品として、小説のほかにエッセイ『カピリーの日々』(Feraoun 1954)がとくに重要である。Hammouche Bey-Omar (2015)はカミュの記事との比較をおこない、フェラウンの作品がカミュの記事に明確に呼応する反論であることを論証している。なお『貧者の息子』とカミュの記事の対照については、Allouche (2010)が詳しい。
- 3 本稿では新聞紙名の日本語表記にあたって定冠詞の記述を省いた。
- 4 カミュのこの記事の文面は、以下に再録されている: Camus 1958(抜粋), 1978, 2005。ま

- たカミュの新しいブレイヤード版全集では、*Actuelles III* (Camus 1958) に再録されなかった 4 回分の記事を別途収録している (Camus 2006, vol.1, pp.653-668)。
- 5 2 年後に、書物として刊行されたようである (Frison-Roche 1941)。
 - 6 レヴィ＝ヴァランシによるカミュの記事の解説 (Lévi-Valensi 1978) 以来定着した見方を示す。
 - 7 日本では 榎木 (1985) がこの方向でカミュとの先駆的な比較研究をおこなっている。
 - 8 『エコー・ダルジェ』はフランス国立図書館 (BnF) の WEB サイトで閲覧することができる。またカミュとフリゾン＝ロシュの記事は BnF の WEB サイトから注文することで PDF ファイルをデータ購入することができる。カミュの記事については、南山大学講師 茨木博史氏に便宜を図っていただいたことを記して感謝する。
 - 9 1912 創刊の、(ヨーロッパ系住民を対象とした) 左派・労働者寄りの姿勢で知られる新聞。アルジェリア独立戦争中には明確に植民地体制維持の姿勢を示し、ド・ゴール大統領がアルジェリアの独立を容認する方向をとってからは反動の立場を鮮明にしたため発禁処分を受けて、1961 年 4 月 24 日号を最後に廃刊となった。
 - 10 「アルジェリアニスム」とはヨーロッパ系のアルジェリア入植者、とりわけアルジェリア生まれのその子孫が、みずからのアイデンティティをフランス本土とは異なるアルジェリアに求めた文化的運動で、1920 年代に文学運動として顕在化した。なお、1930 年代には一般のヨーロッパ系住民の「アルジェリア人」としての覚醒が高まり、アルジェリアの周縁的な地方・奥地を尋ね、またその社会・経済問題などの現状に関心を持つという動きへとつながっていく。こうしてアルジェリア内の旅行ブームが起きるとともに、新聞では地方をレポートする記事がいくつか出されていた。
 - 11 たとえば 1936 年には『労苦の男たちと歡樂の娘たち』*Hommes de peine et filles de joie*、1938 年には『下司ども』*Les Salopards* という小説を発表している。とくに後者はカミュも高く評価していた (1938 年 11 月 2 日の『アルジェ・レピュブリカン』読書欄) 作品であり、帝国文学大賞の候補作ともなった。1941 年には彼の作品全体に対してアルジェリア文学大賞が贈られた。
 - 12 Lévi-Valensi 1978, pp.267-276. この要約文の影響力は絶大で、榎木 (1985)、あるいは Camus (2006) の匿名の序文ほか、信頼のおけるカミュ研究者 André Abbou もジャンンの記事の説明としてほとんど同じ見解と文言を繰り返している (Camus 2006, vol.1, p.1377)。
 - 13 ジャンンを非難するために、レヴィ＝ヴァランシがジャンン (第 3 回) から引用している文章を再録してみよう。ジャンンがカピリー人を「正真正銘の農民人種」とし、次のように説明を続けたくだりである (Lévi-Valensi 1978, p.271)。多くの研究で孫引きされる一節である。

個人主義者で、自分の土地に何が何でも固執し、どんなわずかなものでも隣人の財産

にねたみを抱き、儉約家であるが、その一方で、自分のものを所有することの誇りと、どんなに体制が変わっても、またどのような侵略や社会変化、あるいは地質学的なものを例外としてどのような大災害があっても無くなることのないものに自分の名を冠して子孫に残したいという一心で、土地を——それがいかに「収益を生まない」土地であろうとも——買おうとするのがカピリー人という人種である

- 14 「私たちはフランス人ですしこれからもフランス人であり続けたいのです。なぜなら私たちには過去はないからです。なぜならフランスはますます自由の拡大する国であるからです」(ジャンン、第10回)。植民地支配を喜ぶ被植民者の声をジャンンが引用したこの部分は、あまりにも典型的なコロニアルな報道例として、現在では苦笑を禁じえないほどのものである。ここで注意したいのは、実は本研究で取り上げる三記事に共通してみられるこうした植民地支配に対する擁護の姿勢は、わざわざ声高に肯定しなくてはならないほど、それが当時すでに強い疑問にさらされていたことを逆に示していることである。反植民地運動は、植民地支配の最初から最後まである意味で絶えたことがないと言えるが、メッサーリ・ハッジ Messali Hadj がアルジェリア独立の要求を掲げたのは1927年、独立を目指した「アルジェリア人民党」(PPA, Parti du peuple algérien)の結成は1937年である。カピリー地方は、とりわけ PPA に対する支持の強かった地域である。
- 15 Office (National Interprofessionnel) du Blé. 1936年に人民戦線内閣のもとでフランス各地に設置された農産物の公社で、小麦を生産者から買い上げて国家の管理のもとに公定価格で販売する制度。アルジェリアではとりわけ小麦の異常な高騰という結果を招いた。連載記事のなかでジャンンとフリソン = ロシュは厳しい批判を向け、カミュは擁護の立場をとる。
- 16 Charles Brouty (1897-1984) は1914年から1963年までアルジェリアに在住し、この地のさまざまな風景や人々を温かなまなざしの線描画で描いたことで知られるフランス人画家。フェラウンの『カピリーの日々』の初版は大小73点ものブルティの挿絵を含む。この書物の挿絵でも人物の抽象化は特徴的である。
- 17 Société indigène de prévoyance (SIP). カピリーのさまざまな地域に多数作られた住民どうしの共済組合。「講」のように資金を積み立てて必要な人に回したり、短期・低利の貸し付けや、公共的な事業の主体となったりしていた。
- 18 また、ジャンンが直接会ったのかどうかはわからないが、さまざまなエピソードを語る場合にも具体的な人名が挙げられる。たとえば結婚式に要り用な小麦を3倍の価格で買わなくてはならなかった Boussade Kharoubi の例(第4回)、高利貸しに苦しめられた Akli のケース(第5回)など。
- 19 創刊の辞に続いて「ムスリムの同志へ」と題された呼びかけが掲げられたことにも表されているように、スタッフには現地民も含み、「フランス人」と現地民の「共通の大義」

の追求を標榜する新聞であった (cf. Camus 2006, vol.1, pp.854-856)。厳しい検閲が続いた後、1939年10月に発禁処分を受け、簡素な夕刊紙 (*Soir républicain*) に移行。カミュはその編集主幹を務めるが、戦時下の諸事情からそれも1940年1月に廃刊となる。『アルジェ・レピュブリカン』は1943年2月に共産党系の新聞として復刊。アルジェリアの独立後はFLN (民族解放戦線) の機関紙となって今日に至る。

- 20 石浜 (2015) の第 III 章「書かれたカピリア、読まれるカピリア」、とくに 61-62 ページを参照。
- 21 カミュが報道人としてセンセーショナルなスタイルをとっていることについては、Allouche (2010) の第 II 章および第 III 章で詳しく分析されている。カミュ全集の解説 (Abbou による) には掲載写真について簡単な言及があり、写されている建物や場所がいくつか記されているほか、「悲惨の色々な側面を顕示した」ものが何枚かあると評されている (Camus 2006, vol.1, p.1376)。
- 22 フリソン=ロシュは第二次大戦の従軍経験を経てアルジェリアに戻り、1947年からは『エコー・ダルジェ』紙記者としてヨーロッパ、アフリカ、中東の探訪記事を多数寄稿する。1955年にアルジェリアを離れてニースへ移住、1960年にはシャモニーに山小屋を建てて1999年に亡くなるまでその地で暮らした。小説にはほかに山岳小説や北極圏探検を素材にした作品などを書いているが、代表作の一つ『ザイルの先頭者』*Premier de Cordée* は1941年1-2月に『デベッシュ・アルジェリエンヌ』紙に連載された。
- 23 Feraoun 1950, p.176, 179 (邦訳 p.202, 205); Feraoun 1972, p.121, 122.

参考文献

- Allouche, Boussetta, 2010. *Colonialisme de bonne volonté à l'épreuve en Kabylie, Mouloud Feraoun corrige Albert Camus*, Sarrebruck (Allemagne): Éditions universitaires européennes
- Camus, Albert, 1939. « Misère de la Kabylie », *Alger-Républicain*, du 5 au 15 juin
- , 1958. Camus, *Actuelles III (Chroniques algériennes)*, Paris: Gallimard
- , 1978. *Cahiers Albert Camus*, No.3 (*Fragments d'un combat*), 2vols., Paris: Gallimard
- , 2005. *Misère de la Kabylie*, Akfadou-Béjaïa (Algérie): Éditions Zirem
- , 2006. *Œuvres complètes 1931/1948*, 2vols., Paris: Gallimard (Bibliothèque de la Pléiade)
- Feraoun, Mouloud, 1950. *Le Fils du pauvre, Menrad, instituteur kabyle*, Le Puy (France): Les Cahiers du nouvel humanisme (邦訳、ムルド・フェラウン『貧者の息子』青柳悦子訳、水声社、2016年)
- , 1954. *Jours de Kabylie*, Alger: Baconnier
- , 1969. *Lettres à ses amis*, Paris: Seuil

- , 1972. *L'Anniversaire*, Paris: Seuil (coll. points)
- Frison-Roche, Roger, 1939. « Kabylie 39 », *La Dépêche algérienne*, du 8 au 17 juin
- , 1941. *Kabylie 39*, Alger: SIPA
- Hammouche Bey-Omar, Rachida, 2015. « Camus et Feraoun : Écritures croisées dans *Misère de la Kabylie et Jours de Kabylie* », *Archivo de Frontera*
- Janon, René, 1938. « Fragments pour un diorama de la haute Kabylie », *L'Écho d'Alger*, du 12 au 25 décembre
- Lévi-Valensi, Jacqueline, 1978. « Misère de la Kabylie » (présentation), in Camus (1978), vol.1, pp.271-278
- 青柳悦子, 2016. 「ムルド・フェラウン、歪められた作家像の再検討のために——E・ロブレスとの関係を中心に」、松田幸子ほか編『異文化理解とパフォーマンス』春風社、pp.323-348
- 石浜裕子, 2015. 「獲得した言語で書くこと——ムールード・フェラウン『貧者の息子』の一読解」（一橋大学大学院言語社会研究科提出博士論文）
- 榎木栄, 1985. 「Camus の「Misère de la Kabylie」をめぐる——他紙のルポルタージュとの比較」、『フランス文学』（日本フランス語・フランス文学会）第 15 号、pp.41-51